

「高松塚とキトラ古墳
～壁画古墳はなぜ築かれたのか」を聴いて

聴講日：R 1.12.7
むきばんだやよい塾第20期

高松塚古墳の発見

高松塚古墳は7世紀末から8世紀初頭にかけて築造された終末期古墳で、直径23m(下段)及び18m(上段)、高さ5mの二段式の円墳です。2005年の発掘調査によって、築造は藤原京期(694年～710年)の間と確定されました。1962年頃、明日香村檜前の村人がショウガを貯蔵しようと直径約60cmの穴を、現在の墳丘南側に掘ったところ、穴の奥で凝灰岩の四角い切石が見つかったことが発端となりました。その後、1970年に遊歩道設置のための調査が必要となり、奈良県立橿原考古学研究所に発掘調査が依頼されました。1972年3月に末永雅雄所長指揮の下、関西大学の網干善教授を中心とした関西大学と龍谷大学によって発掘調査が始まりました。発掘開始から間もなく極彩色の壁画が発見されました。古墳は鎌倉時代頃に盗掘を受けて石室の南壁には盗掘孔が開けられていましたが、壁画の彩色は鮮やかに残り、盗掘をまぬがれた副葬品の一部もこの時検出されました。極彩色壁画は考古学史上まれにみる大発見として新聞に発表され、日本中でトップニュースとなりました。発掘作業は、国家プロジェクトとなり文化庁に引き継がれました。その後1973年に高松塚古墳は特別史跡に、また極彩色壁画は1974年に国宝に指定されました。

古墳構造と壁画や出土品

石室は凝灰岩の切石を組み立てたもので、南北の長さが約265cm、東西の幅が約103cm、高さが約113cmと狭く、平らな床石の上に板石を組み合わせた造りです。壁画は石室の東壁・西壁・北壁(奥壁)・天井の4面に存在し、切石の上に厚さ数ミリの漆喰を塗った上に描かれています。東壁には手前から男子群像、四神のうちの青龍とその上の太陽、女子群像が描かれ、西壁にはこれと対称的に、手前から男子群像、四神のうちの白虎とその上の月、女子群像が描かれています。

男子・女子の群像はいずれも4人一組で、計16人の人物が描かれています。中でも西壁の女子群像は色彩鮮やかで、歴史の教科書をはじめさまざまな場所でカラー写真で紹介され、「飛鳥美人」のニックネームで知られています。奥の北壁には四神のうちの玄武が描かれ、天井には円形の金箔で星を表し、星と星の間を朱の線でつないで星座が描かれています。

「飛鳥美人」として注目を集めた西側女子群像は、伸びやかな線と緑、黄、紺、朱、桃色が、目に飛び込んで来ます。南を向いた先頭の女性が「団扇または翳(さしぼ)」、三番目の女性が「如意(にょい)」を持っています。一方、男子群像の一番南の男性は、「胡(こ)床(しょう)」を、二番目の男性は武具の入った赤い袋を肩にかついでいます。三番目の男性は首から鞆を提げ、四番目の男性は鞠打ち遊技の「毬(ぎつ)杖(ちよう)」を持っています。東側壁の女子群像も、先頭の女性が「団扇」、四番目の女性が「払子(ほつす)」を持っており、男子群像の一番南に描かれた帽子をかぶった男性は首から鞆を提げ、二番目の男性は深緑色の「蓋(きぬがさ)」をしっかりと支えて立ち、貴人の頭上に差し掛ける用意をしています。深緑色の蓋は、養老令(757年)では一位の太政大臣級の官僚に許されるものとされています。三番目の男性は首から鞆を提げて、女子群をふり返り、四番目の男性は大刀を袋入れして肩にもたせかけています。

北壁と東西側壁の中央には空想上の動物「四神」が描かれています。北壁には「玄武」、東側壁中央には「青龍」、西側壁中央には「白虎」を見ることができます。南壁には「朱雀」があったはずですが、中世期の盗掘で失われています。四神は、龍(青、東、春)、鳥(朱、南、夏)、虎(白、西、秋)、蛇と亀(黒、北、冬)という象徴的な神獣像で、色と方位、季節を顕在化させたものです。のちに「青春」や「朱夏」、「白秋」、「玄人」などの言葉が派生したわけで、現代社会でも身近な思想として残っています。

天井の天文図は、中国の皇帝や占星術師が天命を知るための一種の占星術にしたがって、実際の天文配置を星座(二十八宿)に整理し、四角く配置を変えて描いたものです。東西側壁の中央上部に描かれる日月像は、金箔と銀箔を丸く貼って太陽と月を表し、東西の方向と地上世界の陰陽秩序を示しています。盗掘されたときに削られてしまいましたが、西の月像にはカエルやウサギなどを描いた痕跡がわずかに残っています。東の日像には、おそらく三

本足の鳥(ヤタガラス)が描かれていたと思われ、どちらも雲海に突き出た山頂とともに描かれています。

石室に安置されていた棺は、わずかに残存していた残片から、漆塗り木棺であったことがわかっています。出土品はほかに、棺に使われていた金具類、銅釘、副葬品の大刀金具、海獣葡萄鏡、玉類(ガラス製、琥珀製)などでした。海獣葡萄鏡は、同型とされるものが中国の西安市東郊独孤思貞墓から出土し、神巧二年(698年)の墓誌を伴っていたことから、高松塚古墳の被葬者論などに争点を投げかけることとなりました。

キトラ古墳の発見

キトラ古墳は、高松塚古墳に続き日本で2番目に発見された壁画古墳です。二段築成の円墳で、上段が直径9.4m、テラス状の下段が直径13.8m、高さは上段・下段あわせて4mを少し超えると推測されています。

1983年に石室内の彩色壁画のひとつである玄武が発見され、2000年には国指定史跡に指定され、続いて特別史跡に指定されました。石室の天井には本格的な天文図が、壁には四つの方位を守る神とされる四神や十二支の美しい絵が描かれています。1983年にファイバースコープによる探査が行われ、石槨の奥壁に玄武と思われる壁画を発見し、1998年にCCDカメラで探査し、青龍、白虎、天文図を発見しました。そして2001年にはデジタルカメラを用いて、南壁の朱雀を確認し、獣頭人身十二支像の存在も確認されました。

2003年の文化庁の石室内調査で、壁画はやがて崩れてしまう極端なもろさであることがわかり、この壁画を守るため、2004年8月より、日本で初めての本格的な取り外しをおこないました。取り外した壁画は細心の注意をはらって修理、強化処理をおこない保存管理しています。古墳そのものは石室と同じ石材でふさぎ、埋め戻しました。

白虎図は、高松塚の白虎とは向きが反対で、朱雀も発見され、保存状態の良い四神が完存していることが判明しました。朱色をした尾の長い雉に似た鳥が、地上を力強く疾駆して飛び立とうとする躍動的な姿は、東アジアに先例のないものでした。また、力強く爪を立てて踏ん張る前足や、顔のどこか戯けたような表情が描かれた白虎は、尾を後ろ足に絡める図像で中国でも例の少ない珍しい図柄でした。

四神図の下方に十二支像も見つかりました。東壁の東北の位置に虎の頭をした獣頭人身の像が見いだされ、これが十二支の「寅」であることが判明しました。「午」の像を剥がしたところ、真っ赤な顔料の衣に包まれた「午」の像があったことから、南壁は朱雀も十二支の「午」も赤く彩られていたことが判明しました。すなわち北は玄武の黒、東は青龍の青、南は朱雀の赤、西は白虎の白となり、四神・十二支の彩色の色分けも理解されていたのです。

高松塚では東壁の青龍と、西壁の白虎はいずれも頭を南に向けています。つまり北に正殿を置き、すべてが南面するという中国古来の発想です。キトラでは白虎のみが頭を北に向けています。つまり四神はあたかも四周を循環するように変更されています。

十二支像は比較的新しい図像で方位を表わすとともに、時間や年代を計る時の基準とされ、北壁の「子」から順に四周壁を循環しています。四神と十二支とが合体して、空間だけではなく時間を巡る構図となりました。

キトラ古墳の天文図には68星座、約350個の星とともに天の赤道、黄道(天球上における太陽の見かけ上の通り道)、内規(常時観測できる天空)、外規(観測可能な天空)の4つの円が描かれています。地球の自転軸の傾きの変化(歳差)に対応して星の位置関係も対応し、その解析から観測年代を推定できます。宮島一彦氏は平壤で観測された天文図ではないかと指摘し、また相馬充氏は、西暦300年代に観測されたもので、観測場所は北緯34度付近で、この緯度には洛陽や長安があることから、「洛陽や長安での観測をもとに製作された天文図が日本に輸入され、壁画に描かれた可能性がある」としています。

高松塚古墳の壁画保存

高松塚古墳の石室内は相対湿度が100%近い高湿の環境であり、修理や調査のために人が短時間石室内に入っただけでも温度の上昇と湿度の低下が起きてしまいます。石室南側の前室部分に空調設備を備えた保存施設は石室内部の温湿度をモニターしつつ、前室内の温湿度をそれに合わせて調整するものでした。しかし、2002～03年に撮影された写真では、雨水の浸入やカビの発生などにより壁画の退色・変色が顕著になっていることが明らかになりました。壁画は切石の上に数ミリの厚さに塗られた漆喰層の上に描かれているもので、その漆喰自体が脆弱化しており、剥落の危険性が懸念されていました。

2004年には国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策検討会が発足しましたが、同年6月20日付け「朝日新聞」大阪本社版朝刊が「白虎」の劣化を大々的に報じたことで壁画の劣化問題が一般にも知られるようになりました。壁画の劣

化防止策や保存方法について種々の検討が続けられ、壁画の描かれている石室をいったん解体・移動して修復し、修復完了後、元に戻すという方式が採用されました。

古墳の築造工程

墳丘の発掘調査と石室の解体修理の過程で、墳丘の築造行程や石室の構築方法が判明しました。

最初に斜面を造成し、築造中の排水をするために溝を掘って暗渠をつくった上で、平らな床石4枚を互いに合い欠きによって組み合わせています。この合い欠きの構造によって、床石は南から北に向けて設置していったことがわかります。床石上面は石室内にあたる部分を削り残し、壁石が建つ部分を一段低く削っていますが、この加工時の杭跡が床石の周囲に残されていました。

この杭跡は鎌倉末期の絵巻物『春日権現霊験記』に描かれた準繩の杭に太さや配置が近似しています。『春日権現霊験記』の竹林殿造営図には、童が浅い水箱に水を注ぎ入れている傍らで、工匠が水の水平面を利用して、細杭に張った縄の水平(陸)を検している光景が描かれています。石室を組み立てる際には、石室の土台となる床石の上面、特に壁石との接地面の水平加工が不可欠であり、床石設置後に、水準杭を打ち、水ばかりを使用して水平に水縄を張り、それを基準に壁石接地面や床面を水平に加工したと思われます。水ばかりは、簡便な水準測量ですが精度が高く、古くから建築や造営に普及していたと想像されるものの、通常の遺跡では地表近くに打たれた杭の痕跡が残ることはまずありません。高松塚の場合は、根元で切断された水準杭の上に版築層が積まれ、版築内にパックされたために、後世の攪乱を受けることなく、杭の先端部分が腐朽、空洞化して現在に残った稀有な例です。

側面の壁石にも合い欠きが施されており、その構造から、北壁を設置後、東西の壁石を北側から順に設置していることが判明しています。南側の閉塞石は一度閉められ、石材の隙間を漆喰で目地止めし、同時に周囲を壁石の上面まで版築で積み上げていきます。この面を利用して天井石を運び、組み立てています。東西側面の下端には各二つずつ抉り穴が掘られており、石材移動の微調整のために利用されたと考えられています。

この後、墓道を掘削し、閉じていた閉塞石を開封し、石室内全面に漆喰を塗って壁画を描きます。石室内に漆塗木棺を納棺して葬送儀礼を行い、その後に再び閉塞石で封鎖して、墓道を版築で埋め戻して古墳が完成します。

版築の色が下層と上層で違っており、強度も下が大きく、直径4センチくらいの棒でたたき締めるので層状に形成されています。針を指して強度計測したら下層は上層より数倍～10倍近くも硬いことがわかりました。地質分析の結果、緑泥岩やセピオライトが確認されています。韓国益山帝釈寺から同様の版築が確認されており、百済から技術導入されたと思われます。ムシロ状編み物の圧痕が見つかっています。今の土木工事でも滑り止めのために合成樹脂性の編み物を混入させることがありますが、プラントオパールが検出されないことから敷いては外していることが推測されます。土を締めるには水分が必要ですが、棒に付くのを防いだり、余分の水分を吸収するのに使われている可能性があります。

また、床石面の精査では、床面に残った長さ217cm、幅66cmのわずかな漆喰の段差が確認されました。石室に安置されていた木棺は、1972年の調査時に漆塗木棺の底部付近が検出され、保存修理によって、長さ199.2cm、幅57.6cmの棺身が復元されていますが、これより一回り大きいことから棺台の痕跡と特定されました。

壁画が描かれた背景

飛鳥時代の壁画では法隆寺金堂壁画が有名ですが焼損してしまい、上淀廃寺の壁画は仏教壁画のジャンルで高松塚とは距離があります。青谷横木遺跡の女子群像は高松塚の壁画の女子群像の髪型や服装とそっくりで、ここに描かれた女子の服装は日本人のものと同感できます。しかし、祭祀の場で使われていたと予想され、色もないので性格としては結びつきはないと思われます。

高句麗には壁画古墳がたくさん発見されていて、江西大墓には四神の壁画がありますが、しかし、漆喰がなく石に直接描かれていて、高松塚が築造された7世紀末～8世紀には高句麗は滅亡しているので、ここから伝来したとは考えられません。飛鳥時代は百済伝来のものが多いですが、壁画については表現が異なっていたり、石に直接描かれていたり、また百済も滅亡してしまっています。新羅には十二支像を彫った石像を古墳の周りに飾っていますが、古墳の中の壁画は例がありません。モチーフとしては共通性がありますが新羅の方が新しく8世紀に入ってからなので、大元の素材は一緒に中国から伝来しているのだと思います。

高松塚築造当時の中国の都は唐の長安で、陝西省には章懐太子、永泰公主、節愍太子の墓が残っています。章懐太子墓の封土は方錐台形を呈し、各辺43m、高さ約18mの大きさで、地下に墓道、甬道をもつ墓室があり、これらの墓室には青竜や白虎をはじめ華麗な色彩の壁画がたくさん描かれています。墓室には寄棟式の石槨があり、墓内より2個の墓誌が発見されています。

中国の墓には墓誌が必ずあり、礼拝石もあります。墳丘全体のスケールが高松塚とは違いますが、壁画の描画技法は共通しており、韓半島より中国の方に似ています。

四神・星宿(天文図)・十二支は、古代中国の陰陽五行思想で東アジアにおける古墳壁画の題材の定番で、高麗・朝鮮まで存続しています。皇帝は天帝から地上世界の統治を委ねられる存在なので、天文観測を行い、天文現象に現れる天帝の意志を常に確認する必要がありました。つまり、空間・時間の把握と管理が天子の支配を正当化する思想でした。

日本の律令国家が完成するときその中国の思想が持ち込まれました。遣唐使は701年まで中断していますが、高松塚の海獣葡萄鏡の同範鏡が、中国の西安の697年に死去した独孤思貞の墓から出土していて、日本に運ばれるまでの時間差を考えると、高松塚には8世紀初頭に納められたと考えられます。壁画の内容は、702年に再開され704年に帰国した遣唐使によるものと推定しています。

明日香村にある古墳時代末期の「野口王墓」と呼ばれる古墳は天武天皇、持統天皇の合葬陵と比定されています。元々の墳形は八角状の五段構造だったようです。内部には切石積みで構築された二つの石室が設けられ、天武天皇の夾紵棺と持統天皇の金銅製骨蔵器が納められていたようです。文武陵説に大きな異論のない中尾山古墳も八角形で、6世紀までの皇族の墓は前方後円墳から四角になり、八角形になっていますので、高松塚は天皇の墓ではありません。高松塚・キトラと兄弟古墳と言える石のトカラ古墳には壁画がなく、壁画は高位のさらに高位の人物の古墳と考えられます。高松塚の被葬者は704年以降に亡くなり、天皇に限りなく近い人物と予想しています。

今年(令和元年)6月に奈良文化財研究所の研究で、平城宮では重要儀式で7本ののぼり旗を横一列に並べていた実態が明らかになりました。3年前に藤原宮跡で見つかった幢幡の設置跡は、中央に1本、その両脇に三角に3本を並べる形態だったことが発表されています。三足烏を除いた太陽、月、朱雀、白虎、青龍、玄武といった四神の意匠は高松塚・キトラの古墳壁画と共通しています。701年に文武天皇が朝賀の儀式で使用したのが嚆矢とされ、孝明天皇の代まで形状を凡そ変えることなく使われたこれらの意匠は、中国の皇帝が使用したシンボルの影響を強く受けていたようです。続日本紀には「文物の儀、是に備われり」と結び、学問や法律などが整って律令国家が誕生したとの宣言ではないかと考えられています。